

JVS APEX

Sustainability Report 2013

環境・社会報告書



アペックスグループ

社名 株式会社アペックス
 本社 〒474-0053
 愛知県大府市柘山町2-418
 設立 昭和38年(1963年)2月
 資本金 8,400万円
 売上高 640億円※
 (平成24年度実績)
 従業員数 1,800人※
 営業拠点 全国主要都市101ヶ所※
 (平成24年12月末)

※株式会社アペックス西日本を含みます。

経営理念

常に改善・改革を繰り返し、
 最高の商品とサービスを提供する

正当な利益を創り、働く仲間の成長と
 社会への責任を果たす

環境保全活動に最善を尽くし
 地球環境との調和を図る



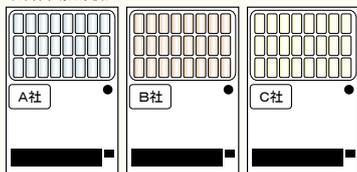
アペックスは専門オペレーターです。

“自動販売機オペレーター”とは、自動販売機を保有してさまざまな場所に設置することによって、中身商品やサービスを提供する業態のこと。オペレーターには、これらの業務を専門的に行う「専門オペレーター」と、飲料メーカーなどがオペレートも兼ねて行う「兼業オペレーター」があり、アペックスは「専門オペレーター」にあたります。

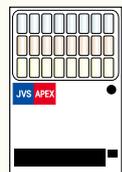
アペックスは専門オペレーターのため、品揃えが特定メーカーに偏ることがありません。このため、売れ筋商品を1台に取り揃えたり、カップ機を併設することもできるアペックスでは、複数の自動販売機を集約することができ、消費電力量とともに、総合的なCO₂排出量の削減を目指します。もちろん、効率的なスペースづくりにも貢献します。

■缶・ペットボトル自動販売機の場合

A社 飲料自動販売機 B社 飲料自動販売機 C社 飲料自動販売機



アペックスの飲料自動販売機



事業内容

自動販売機オペレーター業

全国に拠点をもち、独立系専門オペレーターとして、カップ式自動販売機を約5万3,100台、缶・ペットボトル・紙パック飲料自動販売機を約2万3,000台、その他自動販売機を約1,750台展開しています。従業員様用としてオフィスや工場で、施設のご利用者様用として駅・高速道路SA・PA等で、生徒様や学生様用として学校で、さまざまな方々の憩いにお役立ていただいています。



フード事業

●「スペチャリータ・ディ・カルネ・キッチャーノ」
 ビステッカ(イタリア式炭火焼ステーキ)をはじめイタリアン・スタイルの肉料理に特化した、“メニューのない店”。他にはない個性的なダイニングです。素材は、こだわりの産地から厳選した“個性的な肉”を取り揃え、ドライエイジングで的確に熟成させたものを使用しています。



◆フレンチレストラン「アピシウス」◆

1983年4月に有楽町・蚕糸会館にて創業し、本年、おかげさまで30周年を迎えました。古代ローマ時代の令名高き食通Marks Gavius Apisiusを店名の由来とするにふさわしく、“真実の正統派フランス料理”をご提供するため、そして、お客様に無二の感動を贈るために、その味を磨き続けています。



Contents

目次

● ● 編集にあたって ● ●

東日本大震災で被災された皆様の1日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

アベックスでは、ステークホルダーの皆様との対話を大切に考え、2001年から「環境報告書」を発行し、事業活動に伴う環境負荷の状況と負荷低減の取り組みについて、情報を開示してまいりました。2013年度からは「サステナビリティレポート」と名称を変更し、内容をさらに充実させてまいります。

弊社の環境保全への取り組み・社会とのかかわりを、本報告書を通して、一人でも多くのステークホルダーの皆様にご一読いただき、ご意見を頂戴し、今後の取り組みに活かしてまいりたいと考えています。是非、忌憚のないご意見、ご感想をお寄せくださいますようお願いいたします。

※「環境省 環境報告書ガイドライン（2007年度版）」を参考にしています。

※アベックスでは、本報告書印刷時の環境配慮として、「(コートなし)国産間伐材10%以上配合紙」「植物油インキ」「水なし印刷」を適用しています。これにより、国内の健康な森林の育成に貢献するとともに、CO₂排出量や印刷時の有害廃液の排出量削減、また、リサイクル時の廃棄物削減などに貢献しています。

● ● 報告対象範囲 ● ●

株式会社アベックス

※グループ会社・株式会社アベックス西日本、日本ベンダー整備株式会社、株式会社名古屋フーズの取り組みも一部含まれます。
※ただし、株式会社アベックスの「アビシウス」(フランス料理店)、「キッチンチャーノ」(イタリア料理店)における取り組みは含みません。

● ● 報告対象期間 ● ●

実績 2012年度(2012年4月1日～2013年3月31日)

※一部、直近のデータを含みます。

● ● 発行日 ● ●

2013年7月

● ● 次回発行日 ● ●

2014年7月発行予定

● ● 本報告書に関するご連絡先 ● ●

株式会社アベックス 環境部

〒102-0074

東京都千代田区九段南2-3-14 靖国九段南ビル6F

TEL. 03-3234-6428 FAX. 03-3239-5805

レポート内容は弊社ホームページでもご覧いただけます。

<http://www.apex-co.co.jp>

会社概要	1
経営理念	1
ごあいさつ	3
環境方針	4

特集①

このような取り組みを、広げています	5
このような取り組みを、始めています	6

特集②

生物多様性への取り組み	7
-------------	---

特集③

アベックスの自動販売機・商品開発	9
------------------	---

環境への取り組み

事業活動における環境影響	11
環境保全活動の柱	12
持続可能な社会を目指して	13
環境マネジメント活動	19

社会とのかかわり

地域社会のために	21
----------	----

環境保全活動の歩み	22
-----------	----

ごあいさつ



株式会社アペックス
代表取締役社長

あ 吉 年

これまでの50年。これからの50年。
私たちアペックスは、新しい価値を生み出し、お届けできる企業体として
次の一步を歩み始めています。

今年、株式会社アペックスは創立50周年を迎えました。こうして50周年という記念の年を迎えることができましたことに対し、すべてのステークホルダーのみなさまに心より感謝申し上げます。

創業時から今日に至るまで、私たちは「最高の品質」というこだわりを貫いてまいりました。“最高の品質から生まれる一杯”を紐解くと、浮かび上がってくるのは、自動販売機づくり、商品づくり、品質管理、環境への取り組み等、独自のこだわりであり、まさに「こだわりの一杯」と換言できるかもしれません。一般的に、品質とは、商品に異物の混入がないか等を指しますが、少し幅を広げて考えてみますと、お客様にお届けするお飲み物の“品質”は、それをサービスするオペレート品質、ルートセールス担当者を育成する教育品質、毎日の業務に欠かせない車両の運転品質……数え上げたら枚挙に遑がない“品質”に支えられていることがわかります。そうして積み上げられたものが、アペックスの品質であり、それがブランドという宝になります。どこから見た断面も均一な“品質”でなければ、業務そのものがただら模様になってしまい、その結果、お客様にお届けするお飲み物の品質も低下するという事態を招きかねません。私たちが掲げている「最高の品質」とは、このように広義で捉えた“品質”であり、“最高”というのは1つではなく、それは常により良いものへ

と性能を向上されていかねばならないものであると確信しております。

そのような“高めるべき品質”の1つとして、アペックスが環境に取り組み始めたのは、1996年のこと。まず、環境部を設部しました。もちろん、世界の動向からも、これからは環境との付き合い方を語れない企業は生き残れないという自覚をもって新規の部署を創設したのです。そうは言っても、当時は、まだまだ「環境」というと外部不経済の際たるものという受け止め方が一般的でした。

ポスト京都議定書の第二約束期間は不参加表明をし、気候変動枠組み条約締約国会議においては化石賞受賞の常連となっている現在の日本では、「温室効果ガス削減」という言葉はいつしか遠退いています。しかし、そんな昨今、皮肉にも私たちはPM2.5飛来問題に脅かされ始めています。目に見えない温室効果ガス濃度の高まりというものは実感できなくとも、具体的な大気汚染物質には脅威を感じています。健康が危ぶまれる可能性があるという、具体的な危険の可視化によって、初めて人は危機感を募らせるのです。即物的なものには反応しますが、茹でカエルのようなものである地球温暖化問題はとかく後回しにしがちだということが顕著に出ています。また、ここ2年の冬の寒さは、これも皮肉なことに、地球温暖化が要因の1つとされる北極海氷の融解に

環境方針

(2011年3月1日改訂)

【基本理念】

アペックスグループは、地球環境の保全が世界共通の課題であることを認識し、経営の最重要課題の一つに「地球環境との調和」を掲げ、自らの責任として、環境保全活動に最善を尽くします。

【基本方針】

アペックスグループは、自動販売機オペレーター業界の一員として、持続可能な低炭素社会を築くために豊かな自然との共存を目指します。

1. 事業活動、製品及びサービスが環境に与える側面を的確に捉え、環境マネジメントシステムを継続的に改善し、汚染の予防に努めます。
2. 環境側面に関係して適用可能な法的要求事項及びその他の受入れを決めた要求事項を順守するとともに、国、自治体等の施策に積極的に協力します。
3. 循環型社会の実現と省資源に向けて、事業活動のあらゆる側面で原材料・エネルギーなどの4R(リデュース、リユース、リサイクル、リカバー)を、適正且つ積極的に推進します。
4. 業務の改善に取り組み、総合的な環境保全活動に努めます。
5. 周辺地域の環境美化等に積極的に取り組み、地域社会に貢献します。
6. 環境方針は一般に開示します。

よってもたらされるものだというのが定説になりつつあるにもかかわらず、これさえややともすると温暖化を過小評価したり揶揄したりする風潮さえあり、次世代エネルギーを本気で育てようともせず、このまま温暖化に無関心な国となってしまうと、環境という分野でまで日本はガラパゴス化してしまう危惧があります。

景気に先行き不透明感が強いと、とかく環境活動は後回しにされがちです。企業における利益を圧迫するといわれてきた環境活動である環境軸と、収益獲得活動である利益軸が、トレードオフの関係にあるという認識が一般的に抱かれがちですが、同一方向に向けることで双方をさらに伸ばすマネジメントを実践していかなければならないと考えます。

私たちは、運営する飲料自動販売機について、国内の人口減や省エネという観点から、ご利用の少ない自動販売機については、エネルギー消費効率を高めるために効率よい設置場所への移設や統合による台数減という提案を、これまで同様、推し進めてまいります。もちろん、オペレートの効率を高め、総合的な環境負荷低減に努めるという方針は従来通りです。環境軸と利益軸との方向を確認しながら、あらゆるムダ・ムラ・ムリを排除してまいります。

また、全国的に防災意識が高まる中、弊社のカップ式自動販売機が東日本大震災後の復興支援に貢献

できたという実績と経験を活かした「災害対応型カップ自販機」の積極的提案や、業界初の間伐材紙カップの使用促進にも努めてまいります。

「50年」を機に、あらためて企業の責任というものを考えます。私たちにできることはなにか……それは継続する力に他ならないと考えます。企業として、利益を出し社会に還元していくこと、社員の将来までを担うこと。そして、環境への取り組みを通して、後世に“人が人らしく暮らしていける地球”を残していくこと。それらに対し、継続させていく力こそが、これからも事業を営んでいくうえで重要であると確信しています。

今般、『サステナビリティレポート2013』に、昨年度1年間の取り組みをまとめました。この報告書を一人でも多くのステークホルダーの方々にご覧いただき、私たちの考え方や取り組みをご理解いただくこと、そして、私たちの取り組みに対するご意見、ご評価を頂戴し、今後の活動に活かしていくことが、アペックスグループの今後の社会・環境活動のたゆみない歩みへとつながっていくと考えています。

2013年7月吉日

このような取り組みを、広げています。

▶ カップ式自動販売機での災害時における支援協力に関する協定書を締結しています。

東日本大震災後間もない頃、道路が寸断され、メーカーの工場も被災し、スーパーやコンビニエンスストアに物資が届かない状況において、アペックスでは「ライフライン」という位置付けのもと、カップ式飲料自動販売機で微力ながら支援させていただきました。まだ雪の降る寒さの中での温かい飲み物と、自己完結型の衛生的な紙カップに対する高いご評価を被災者の方々から頂戴いただきましたが、その様子をご覧いただいていた宮城県多賀城市様が、カップ式自動販売機の存在価値を非常に高くご評価くださり、全国に先駆け、アペックスとの「災害時における支援協力に関する協定書」を締結。それを皮切りに、広島県呉市、茨城県龍ケ崎市、愛知県大府市をはじめとした地方自治体様や病院様、企業様へと、その輪は広がっています。

飲料確保の手段として、多様性を持たせることは非常に重要です。アペックスでは、非常時に十分とは言えない自助・公助を補完する共助の1つの術として、災害対応型カップ自販機を提案しており、さまざまな災害想定が発表されている昨今、今後の防災を見据えた対策として、関心が高まっています。

標準メニュー



災害時メニュー



災害時には、レギュラーコーヒーの商品ボタンが、「お水」と「お湯」ボタンに早変わり。お薬の服用や、乳児のミルクをつくるのにお役立ていただけます。

▶ カップ式自動販売機で、水の“地産地消”を推奨しています。

近年、飲用としての「水道水」が、環境に意識の高い人々の間で関心が高まっています。

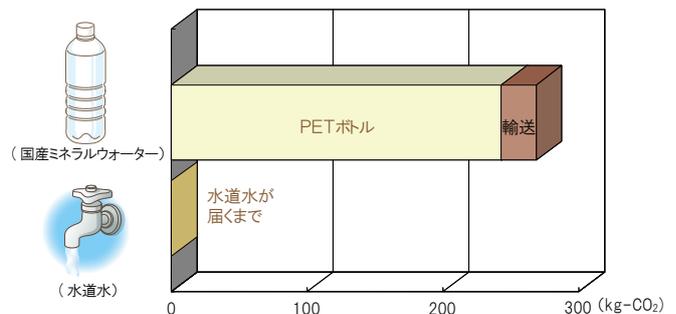
その理由の1つが、飲料水の輸送に伴うCO₂排出量。輸入されたものより国産品が、また、国産品でも、購入する土地に近いところで製造されたものが輸送に伴うCO₂排出量は少なく済みますし、さらに水道水となると言うまでもありません。そして、もう1つの理由は、ライフサイクルにおけるCO₂排出量です。水道水が各家庭に届くまでには、取水場、浄水場、配水場の各工程で電力が使用され、その使用によりCO₂が排出されます。一方、PETボトル入りミネラルウォーターは、容器製造と輸送、リサイクルという各過程でCO₂が排出されます。両者のライフサイクルを比較した場合、水道水のCO₂排出量は、PETボトル入りミネラルウォーターの約1000分の1以下ともいわれ、環境負荷の低さが顕著に出ます。

このように、飲料水の供給方法として、他の代替手段よりも環境負荷の面で優れているうえ、おいしい水道水。カップ式自動販売機は、そんな地元の水道水を利用しています。さらに、「水」にこだわるアペックスは、高レベルフィルターを自動販売機内に取り付け、水道

水をもっとおいしく安全にしたうえで、お飲み物を1杯ずつ機内で調理しています。日常生活に欠かせないものだからこそ、環境負荷のできるだけ低い飲み物を選んでいただきたい。飲用水も“地産地消”の時代だとアペックスは考えます。

■資料 --- ライフサイクルにおけるCO₂排出量比較 ---

※「1m³の水（500ml入りPETボトル2,000本相当）」のライフサイクル



※PETボトル（耐熱用500ml入り）のインベントリは「平成16年度容器包装ライフサイクル・アセスメントに係る調査事業報告書（財団法人政策科学研究所）」に基づき、山梨でミネラルウォーターを充填したものを、名古屋まで輸送する場合を想定して算出しています。

※「水道水が届くまでに排出されるCO₂」については、名古屋市上下水道局「環境報告書2012」を参照しています。

このような取り組みを、始めています。

▶ 再生可能エネルギーの普及に貢献します。

アペックスでは、大府本社リニューアル時に、社屋に太陽光パネルを設置しました。

現在、他の再生可能エネルギーと比較しても、エネルギー変換率が決して高いとは言えず、また再生可能エネルギーそのものの実用化までの道のりはまだまだ容易とも言えない状況ではありますが、普及に向けた取り組みは非常に重要であると考えます。



再生可能エネルギー

石炭・石油などの有限で枯渇性の資源や原子力とは異なり、自然環境の中で繰り返し起こる現象から取り出すエネルギーの総称。具体的には、太陽光・太陽熱、水力（ダム式発電以外の小規模なもの）、風力、バイオマス、地熱などを指します。地球環境に対して負荷が少ないことから注目されている一方、エネルギー密度が低く、コスト高や不安定性等、多くの課題も挙げられています。



▶ 次世代のクルマについて、検討しています。

走行中の二酸化炭素・大気汚染物質の排出がないという点において、非常に優位性のある電気自動車（以下、EV）。ガソリンや軽油といった化石燃料に依存しないため、エネルギーのランニングコストが中東情勢に左右されないことや、充電したエネルギーを非常用電源としても活用できることなど、これまでのクルマにない魅力を数多く持っています。

全国の営業拠点や本社で約1,500台の車両を有し、自動販売機のオペレートや営業活動にクルマの存在が欠かせないアペックスは、車両走行という環境側面が及ぼすグループ全体の環境影響は非常に大きいという認識を持ち、クルマ選びを行っています。

現時点においては、ライフサイクル全般に亘って評価した場合、EVよりも低燃費車の方が環境負荷が低いことは明確です。しかし、グループの未来のクルマ運用を検証し、模索することは非常に意義があると考えています。そこで、三菱自動車工業株式会社様のMINICAB-MiEVを倉敷営業所に初めて導入しました。



生物多様性への取り組み

▶ 間伐材紙カップの導入

日本の森林は、いま

日本は国土面積の67%、つまり約3分の2が森林です。世界の国の中でも森林率の高いことで知られているフィンランドやスウェーデンのように、日本も世界ではトップクラスの森林国といえます。

森林には、二酸化炭素吸収源という機能をはじめ、森林の土壌保全・山地災害防止機能、多くのいのちを育む生物多様性保全機能、水源涵養機能などの公益機能のほか、材木や燃料エネルギーを生み出すなど、数多くの重要な機能があります。

日本の森林のうち、天然林が約60%、残りの約40%が人の手によって管理されている人工林です。人工林では、まず、苗木を植える「植栽」に始まり、その後は、余分な枝を切り落とす「枝打ち」、曲がったり枯れたり成長の悪い木を伐る「除伐」、成長過程で過密になった森林を適当な密度にするために抜き伐りをする「間伐」などの作業が数十年にわたって実施され、ようやく健康な森林が育まれるのです。

ところが、いま、日本の人工林の約4割が手入れの必要な状態に陥っているとされています。その原因は、社会や暮らしの変化に伴い、プラスチックや金属、そして外国からの輸入材の使用が増えたため、木材、とりわけ国産材の需要も減ってきたことにあります。

業界※で初めて、間伐材紙カップを展開しました。

健康な森林を育むためには、「植える」→「育てる」→「収穫する」→「上手に使う」というサイクルが大切です。「上手に使う」ことが減れば、次第に「植える」ことも「育てる」こともなくなってきてしまいます。

平成22年10月に「公共建築物等における木材の利用促進に関する法律」が施行され、公共建築物への木材・木質化の促進、機等の備品やコピー用紙等の消耗品についても木材を原材料として使用したものの利用の促進が行われています。

そこで、アペックスでは、健康な森林を育み、木材自給率の向上に貢献するため、使用する紙カップ原紙に、業界※で初めて、国産の間伐材紙を利用しました。



※日本自動販売機オペレーター業界

健康な森を育むサイクル





▶ サスティナブルコーヒーの展開

■ コーヒーと生物多様性



コーヒーの原産地は、赤道をはさんで北緯25度・南緯25度の間の熱帯地帯にある約70カ国に集約されており、このコーヒー栽培に適した気候、土壌をもつ地域のことを、「コーヒーベルト」や「コーヒーゾーン」と呼んでいます。そんな中でも、一般的には、平均気温が25度前後、年雨量が1,300~1,800mm、高度については、900メートルから2,000メートルの間の地域が、良いコーヒーをつくりだす条件とされています。

コーヒーベルトは、コーヒーの産地であると同時に、多くが発展途上国であり、熱帯雨林をはじめとする生物多様性の宝庫でもあります。このことは、言い換えれば、コーヒー農園そのものが、生物多様性を維持する場でもあることになります。

消費国のわたしたちがおいしさを享受できればよいというのではなく、現在のことだけでなく未来のことも考えた上で、生物や自然環境、生産者の人々の生活を良い状況に保つことを目指して生産・流通されるコーヒーの総称を「サスティナブルコーヒー」といいますが、商品を選ぶ時、それが環境に配慮したものであるかを検討することが、コーヒー農園の保全になり、コーヒー農園が包括する生物多様性の保全につながります。

アペックスでは、これから先もずっとおいしいコーヒーをお届けするために、そんな誰もが日常的にできる環境保全活動を推進し、展開するコーヒーにもサスティナブルコーヒーを取り入れています。



■ アペックスのサスティナブルコーヒー

●「有機栽培生豆100%使用コロンビア」(2001年春~)

---有機JASマークの付された有機農産物とは---

自然の力を最大限に利用した農業である有機農業によって生産された農産物のことで、次の要件を満たすことが必要です。

- 堆肥等で土作りを行い、種まきまたは植え付けの前2年以上（多年生作物※にあつては、最初の収穫前3年以上）、原則として化学肥料および農薬を使用していない田畑で栽培する。
- 栽培中も、原則として化学肥料および農薬は使用しない。
- 遺伝子組換え技術を使用しない。

※果樹、茶木、アスパラガスなど。コーヒーやカカオも多年生作物。

「有機栽培生豆100%使用コロンビア」の麻袋（点線内に有機JASマーク）
※写真提供：株式会社ユニカフェ



●「ブラジルブレンド」(2010年秋~)

- レインフォレスト・アライアンス認証の
ダテーラ農園で生産されたコーヒー豆を30%使用 -



--- レインフォレスト・アライアンスとは ---

地球環境保全のために熱帯雨林を維持することを目的に設立された国際的な非営利環境保護団体です。本部は米国ニューヨーク。

サスティナブル・アグリカルチャー・ネットワーク(SAN)によって定められた、100項目に及ぶ社会的、環境的、経済的基準に基づき、農園の認証を行っており、生物多様性及び労働者と地域共同体の権利と社会的境遇を守るために活動しています。レインフォレスト・アライアンスの基準を満たす農園や森林には、アメリカ、ヨーロッパ、アジアなどの企業や消費者に広く認知されつつある認証マークを使用する資格が与えられます。



◀ダテーラ農園

アペックスの自動販売機・商品開発

▶ さらなるエコベンダーを目指して

省エネルギーとCO₂排出量の削減

アペックスは、自社内に開発部をもつ、唯一の自動販売機オペレーターです。独自の自動販売機開発を続けるアペックスは、オペレーターという立場を活かし、お客様にとって使い易くて安心してご利用いただけることはもちろん、製造から廃棄・リサイクルに至る全ライフサイクルにおける環境負荷低減に努めた、独自の自動販売機開発を続けています。

業界最省エネ※ カップ式自動販売機の開発

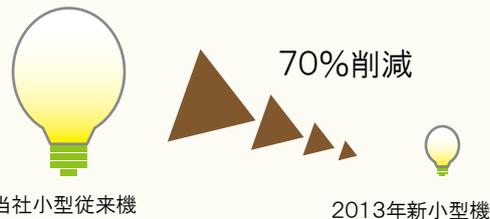
アペックスでは、グリーン購入法の基本方針に示される『判断の基準』に適合した機種種の開発に努めております。特に、最新の機種においては、これまでの環境配慮機能に加え、最新の機能を搭載した、業界最省エネ※カップ式自動販売機の実現させました。

※2013年3月1日現在

大幅な年間消費電力量の削減

トップランナー基準値を大きく達成するとともに、CO₂の大幅削減に貢献します。

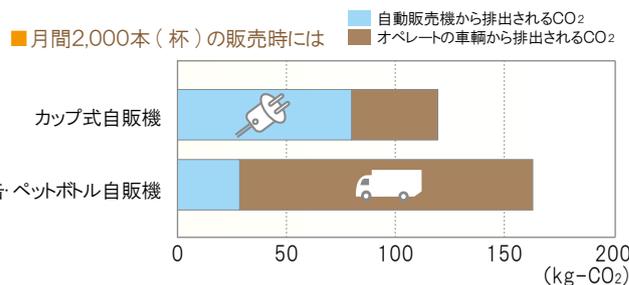
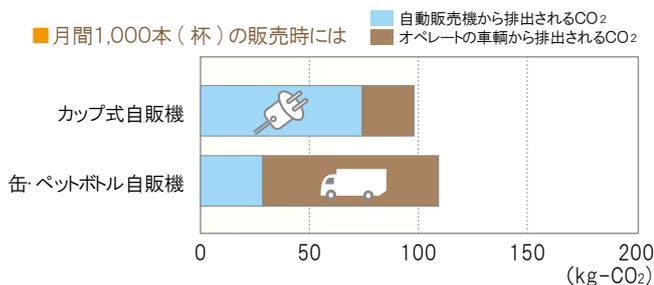
CO₂排出量



ピークシフト・ピークカット機能搭載

24時間内で任意の時間帯設定が可能ですので、ロケーションの状況に応じた組み合わせに対応できます。

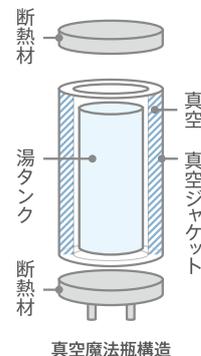
■資料 --- ～ 環境負荷は目先のことだけではなく、広い視野で考えねば意味がありません ～ ---



※いずれも当社による一般的な自動販売機での検証

熱を逃がさない魔法瓶構造

タイガー魔法瓶株式会社の技術を応用して、共同開発した「真空断熱ジャケット」を湯タンクに搭載。保温機能が格段に向上し、消費電力量の大幅削減を実現しました。



CO₂冷媒を採用

冷却システムにノンフロン冷媒（CO₂）を採用しました。ノンフロン冷媒だから、オゾン層破壊係数「0」、地球温暖化係数（GWP）「1」。地球温暖化防止にも、オゾン層保護にも貢献した、いま、最も環境に配慮した冷媒です。

スリープモード機能搭載

カップ式自動販売機は、食品衛生上、完全に全ての電力を断つことが難しいのですが、例えば、ご利用のない休日に、ほぼ完全停止に近い環境を作り出すことができる機能です。

電照表示部の消灯および湯タンク運転・水槽運転・製氷運転の電力を最小限にして「販売不可」と表示し、設定した時間になると「販売中」に復帰する高効率なものです。

蛍光灯レス

標準出荷時は、蛍光灯レス。

人感センサー連動の全面均一LED照明導光板を、オプションで準備しています。

▶ 商品づくりへのこだわり

■ アペックスのコーヒーへのこだわり

アペックスでは、自動販売機の開発とともに中身商品の開発も飲料原料メーカーと共同で行います。

レギュラーコーヒー豆は、自社のオリジナル自動販売機から一杯ずつ最適な味と香りでコーヒーを抽出できるよう、最良の豆を選定します。ブレンドやロースト度合など、細かい仕様をメーカーにオーダーし、その後、何度も試飲をくり返し、指定通りにできているか、ロット毎にチェックします。そして、アペックス基準を満たしたもののだけが、自動販売機で販売され、お客様のお手元に届くのです。

■ アペックスのコーヒーのおいしい理由

- 時代やお客様の嗜好に合わせたブレンド
- ホットとアイス、それぞれに最適な原料
- 当社オリジナル自動販売機専用
- きめ細かな味調節機能付き
- 最適な湯量
- アイスコーヒーは氷入り
- カップミキシング機構で調理



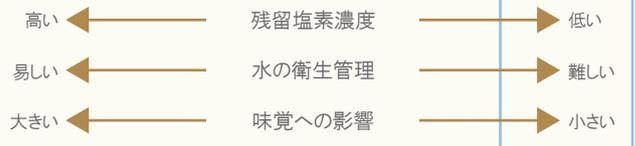
アペックスの「水」へのこだわり

コーヒーや、清涼飲料水を製造するのに、水は欠かせません。缶やPETボトルという容器に予め充填された飲料も同じことです。とりわけ、その場でその都度飲み物をつくるカップ式自動販売機は、自動販売機内がいわば飲料製造工場や喫茶店と同様ですから、アペックスは「その場の水」にこだわります。

そこで、アペックスでは、使用する水の状況に応じて、最適な水フィルターを使い分けています。また、同じ種類のフィルターの中でも、より高レベルのものを使用し、安全・安心はもとより、飲み物の「おいしさ」を大切にしています。

- カーボンフィルターは残留塩素や懸濁物を除去します。
- 殺菌フィルターは残留塩素や微粒子、原虫を除去します。

フレ(糸巻)フィルター
塩素発生装置取り付け



アペックス

カーボンフィルター
殺菌フィルター

■ “国産国消”へのこだわり

アペックスでは、コーヒーの他にバラエティ商品も数多く販売しています。コーヒー同様、くつろぎのひとつのための“最高の一杯”であるために、社会動向やお客様ニーズを的確に捉えなければならないことは言うまでもありません。

近年では、食の安全・安心への関心の高まり、また、環境意識の高まりから、“地産地消”あるいは“国産国消”への意識が年々強くなっている背景を受け、バラエティ商品にも国産農産物を使用したものにこだわりながら商品づくりを行っています。



※北海道あずきを使用した「あずきラテ」、岩手県産山ぶどう使用の「ふせのぶどう」、高知産ショウガエキス・国産レモン果汁使用の「ジンジャーレモン」、紀州産南高梅を使用した「梅」など、原材料にもこだわります。

また、アペックスでは、販売サービス部門に携わる社員の知識と技能の向上を図るため、国家検定「自動販売機調整技能士」の資格の取得を奨励し、社内の技能評価の基準として採用しています。

等級	特級	1級	2級
人数	33名	338名	402名

アペックスの環境負荷



▶ 環境負荷低減のために

アペックスでは、事業活動にともなって発生する環境負荷の継続的な低減を図るために、事業活動において使用している資源やエネルギーの使用量、空き容器のリサイクル量と廃棄物量等を集計、分析しています。

アペックスでは、お客様のもとから回収した紙カップや缶・ペットボトル等の空き容器のマテリアルリサイクル・サーマルリサイクルを実施している他、レギュラーコーヒー抽出にともない発生する残渣については、2008年度に開始した肥料化へのリサイクルを継続して行うとともに、2010年度からは新たに炭化リサイクルも行っています。

エネルギー起源によるCO₂排出量については、より消費電力量の小さい自動販売機の開発や、お客様へ

の適正台数・適正配置の設置提案、さらなる給油量削減を目指すための車輛の選択、使用方法指導等の実施により、今後も削減に努めてまいります。

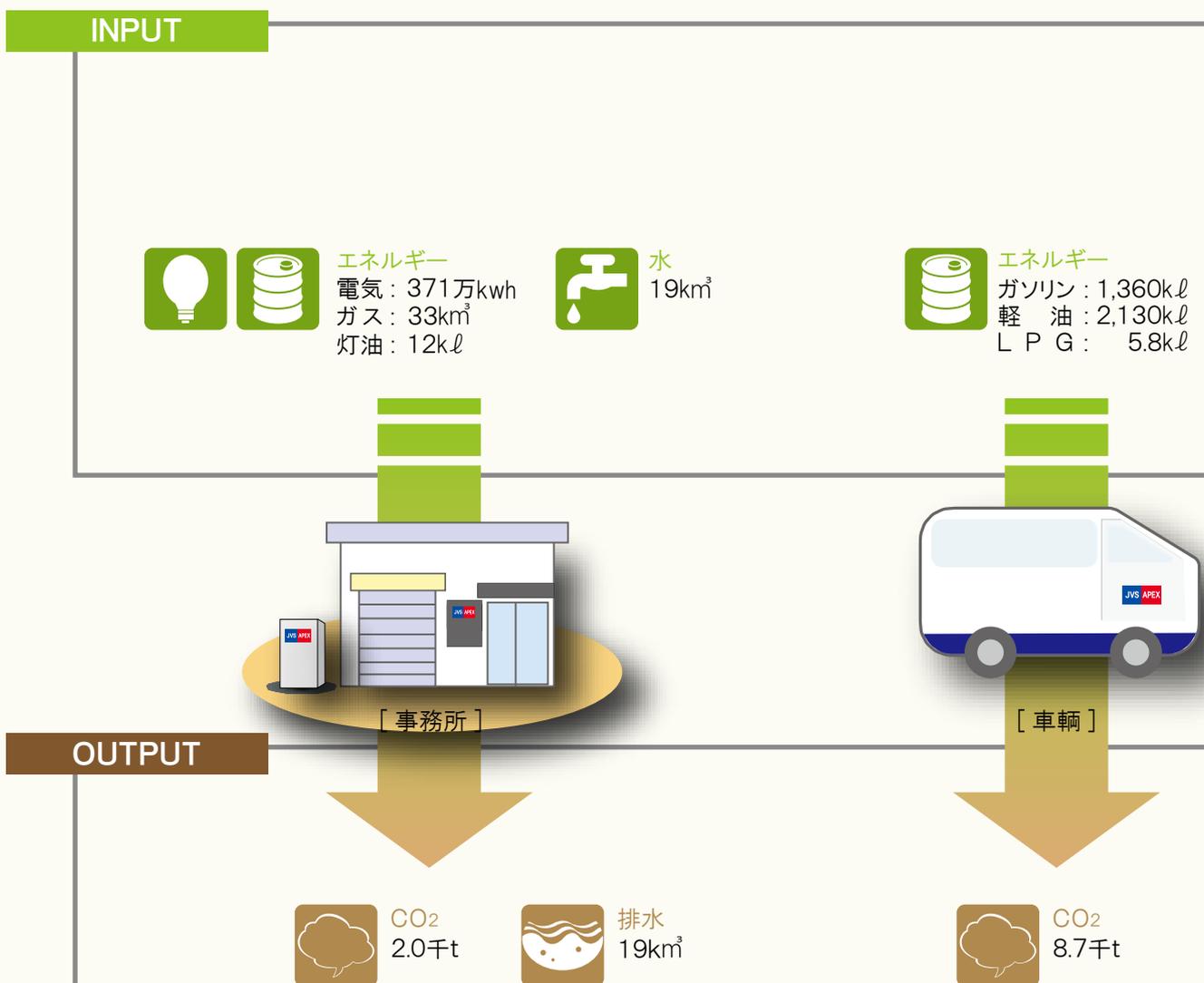
また、紙カップ原紙には間伐材や合法木材を使用したり、コーヒー豆の調達には生物多様性の保全も視野に入れる等、エシカル調達にも取り組んでいます。



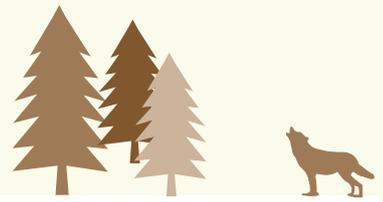
エシカル調達

グリーン調達に加えて、環境問題や人権問題など様々な側面を調査した上で調達することをいいます。

■ 事業活動における環境負荷



アペックスが推進する4つの「R」



▶「4Rの推進」を環境方針でコミットメント

アペックスでは、1996年に環境部を設部して以来、一般的な「3R」（「Reduce - 発生物を抑制する、削減する -」・「Reuse - 再利用する -」・「Recycle - 再生する -」）に、「Recover - エネルギーで再利用する -」を加えた「4R」を、環境保全活動の中核として活動しています。4つめの「R(Recover)」とは、アペックスの取り組みの特長の1つで、自動販売機から排出される可燃廃棄物をRPFという固形燃料にし、エネルギーとして再利用するという活動（詳細は、13頁～16頁をご参照ください）です。

アペックスでは、「4R」を活動の柱としながら、今後も、持続可能な循環型社会、低炭素社会構築に努めてまいります。



【コーヒー豆】
サステナブルコーヒーの調達に努めています。



【紙カップ】
間伐材や合法木材を使用しています。



エネルギー
電気：168百万kwh



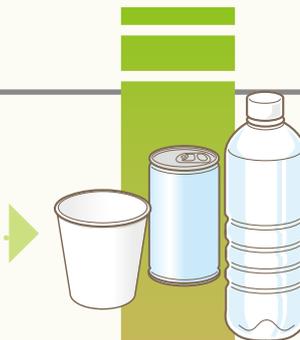
水
102km³



容器
紙カップ：3.0千t
缶 等：5.1千t



[自動販売機]



[容器]



CO₂
76.5千t



排水
12.3km³



リサイクル
紙カップ：1.2千t
缶 等：3.1千t



一般廃棄物
2.6千t

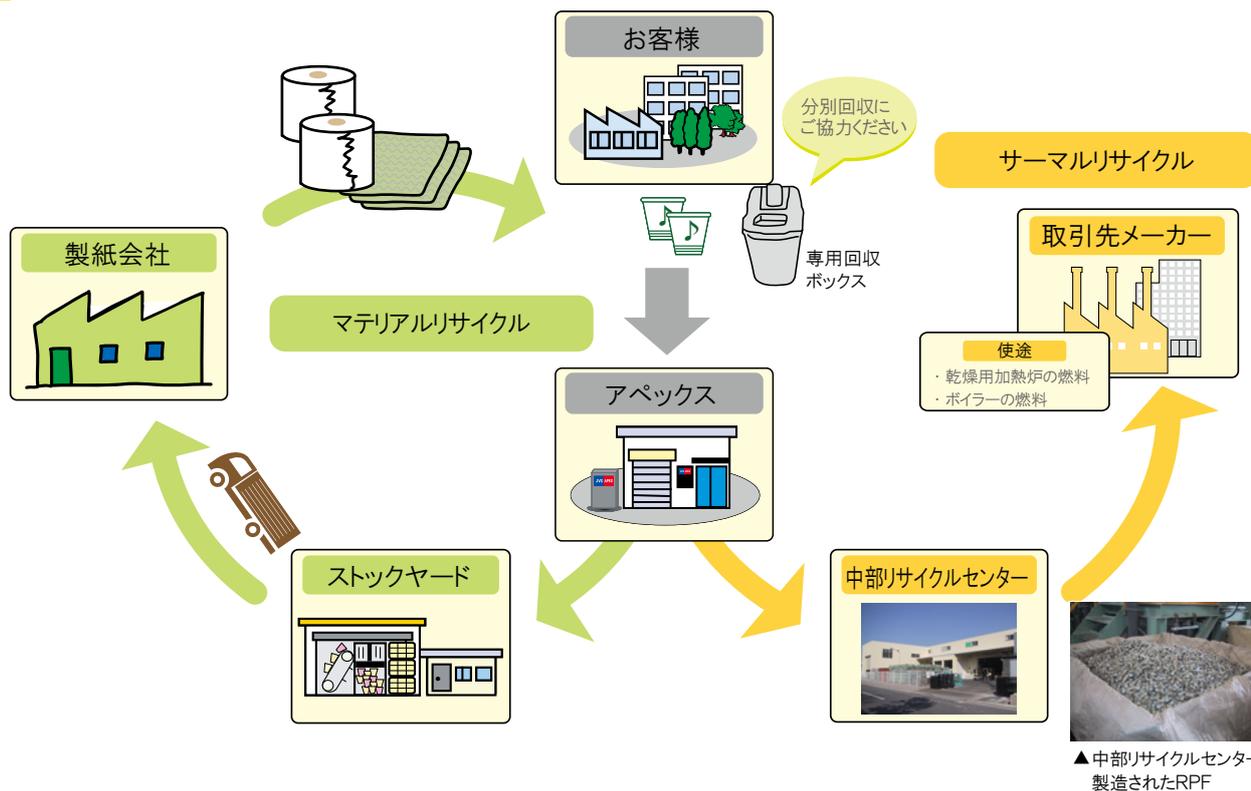


▶ 資源の循環利用

アベックスでは、回収した紙カップの材料リサイクルを1998年から開始。また、2001年からは「可燃廃棄物」をリサイクルの対象物としたサーマルリサイクルにも取り組んでいます。

容器包装類、プラスチック類の廃棄物を回収からリサイクルまで責任を持って一括管理することにより廃棄物の削減に努め、循環型社会構築に貢献しています。

■ アベックスのリサイクルシステム



マテリアルリサイクル

廃棄物を原料として再利用すること。同義語に「材料再生」「再資源化」等があります。具体的には、使用済み製品や生産工程から出るごみなどを回収し、利用しやすいように処理して、新しい製品の材料もしくは原料として使うことを指します。アベックスでは、使用済み紙カップを回収して衛生紙等（トイレトーパーやクレープ紙）にリサイクルしています。



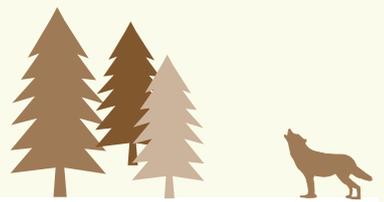
サーマルリサイクル

廃棄物を単に焼却処理するだけではなく、焼却の際に発生するエネルギーを回収・利用すること。サーマルリサイクルには、油化、ガス化の他に、ごみ焼却熱利用、ごみ焼却発電、セメントキルン原燃料化、廃棄物固形燃料（RPFやRDF）などがあります。アベックスでは、自動販売機を通して排出される可燃廃棄物をRPFにしています。

■ RPF(あーるぴーえふ)

廃棄物固形燃料の1つ。アベックスでは、使用済み紙カップや紙パックなど、主に紙とプラスチックを破碎・圧縮して作っています。

※Refuse Paper&Plastic Fuelの略。



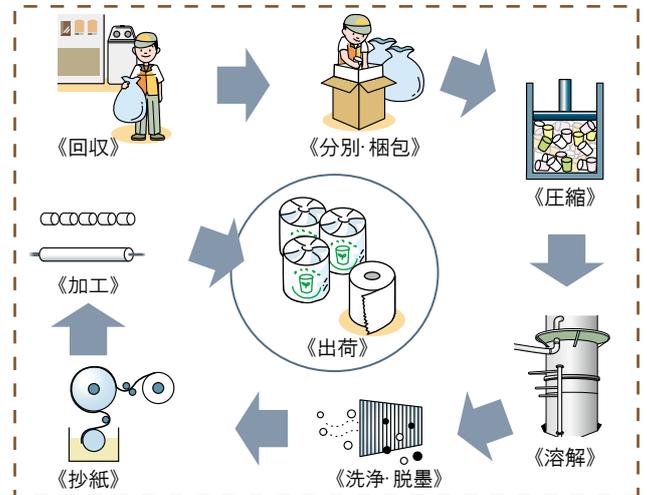
▶ アペックスのマテリアルリサイクル ～紙から紙へ～

アペックスでは、廃棄物の削減、森林資源の保護、生物多様性の保全や、水資源・土壌の保護を地球環境問題の重要な課題であると考え、その取り組みの1つとして、紙資源の有効活用をしています。

アペックスでは、1997年、当時、リサイクルできないものの1つと言われていた紙カップのマテリアルリサイクルシステムを確立。翌年の1998年より、回収した紙カップを衛生紙（トイレトーパー等）や緩衝材へリサイクルしています。

2012年度の実績

2012年度は、約115tの使用済み紙カップ等のマテリアルリサイクルを行いました。



▶ アペックスのサーマルリサイクル ～紙・廃プラからエネルギーへ～

2001年3月、自動販売機を通して排出されるすべての可燃廃棄物のリサイクルを目指し、愛知県大府市において「車輛搭載型固形燃料化設備」を保有し、中部地区の事業所から発生する可燃廃棄物の固形燃料（RPF）化を実施しました。

そして、2004年10月に開設した[中部リサイクルセンター]では、産業廃棄物処分業許可を取得し、自社が運営する自動販売機を通して排出されるものはもとより、社外から発生する廃プラ類をも受入れ、固形燃料化し、廃棄物の削減に努めています。製造したRPFは、検査機関に持ち込み、重金属や塩素等の項目について成分分析を行っています。

アペックスのRPFは、家庭系一般廃棄物から製造される生ゴミ・水分を主体としたRDFとは異なり、原料が安定しており、塩素や水分がほとんど含まれていないので、安心してご使用いただける固形燃料です。

2012年度の実績

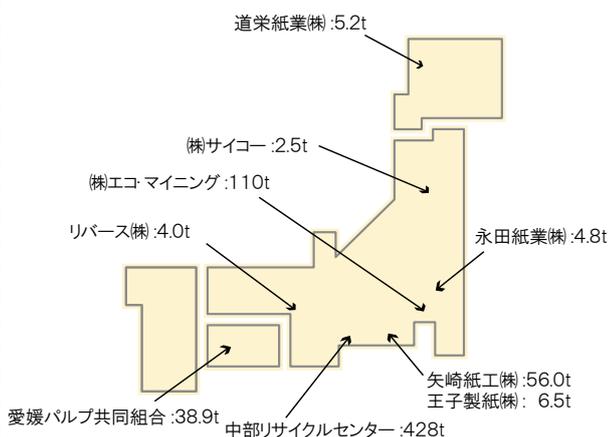
2012年度は、約1,085tの使用済み紙カップ等のサーマルリサイクル（余熱利用等含む）を行いました。

	アペックスのRPF	RDF
発熱量(cal/g)	6,000程度	4,000程度
塩素分(%)	0.2未満	2.0未満

※中部リサイクルセンターのRPF化ラインで製造されたRPFの成分と一般的なRDFを比較

▶ リサイクルの実績と今後の課題

2012年度の主なリサイクル実績



今後のリサイクル展開計画と課題

リサイクルを実施するうえで、運送効率をあげることは非常に重要な課題です。アペックスでは、まだ改善の余地があると考えており、今後も、新たな回収便ルートの確立や地元協力会社との提携等の検討を重ねることにより、輸送距離短縮や効率化による環境負荷低減を図り、リサイクルの効率化を目指します。

今後も、それぞれのリサイクルの特長を活かしつつ、より環境負荷の低いサーマルリサイクルを中心とした、紙カップリサイクルを推進していく予定です。





▶ 資源循環への取り組み

アベックスでは、循環型社会構築のために、回収した可燃廃棄物をリサイクルするだけでなく、自主的に拡大生産者責任を課し、リサイクル製品の販売を実施し、資源の循環に努めています。

●衛生紙（トイレトーパー等）

学校や企業などの自動販売機設置先であるお客様にご利用いただいています。

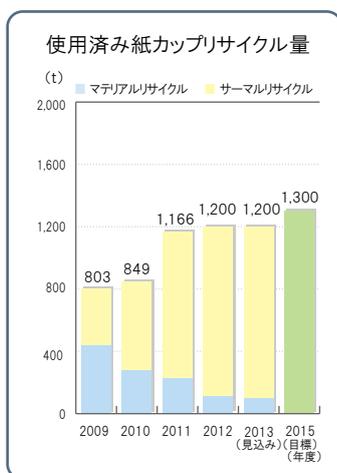
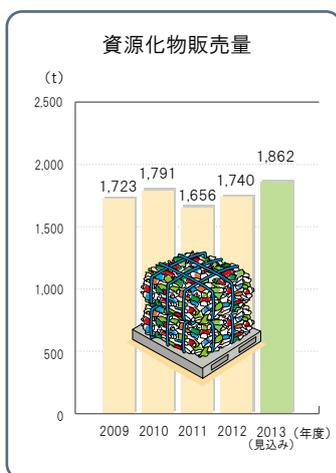
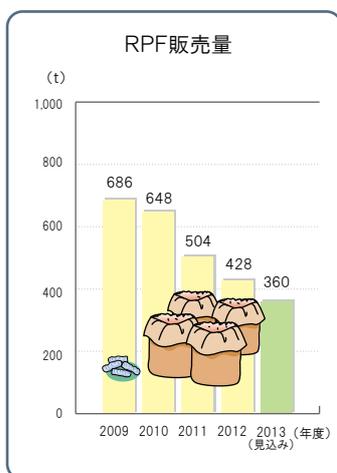
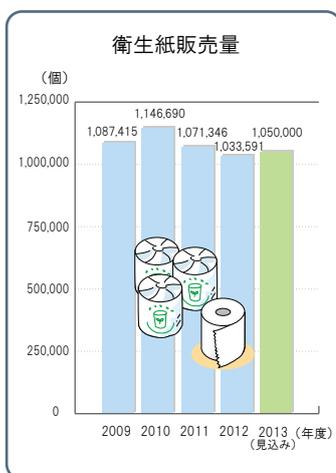
●RPF

石炭の代替燃料として使用されています。

※RPF1tは、石炭0.83tに相当します。

●資源化物

種類毎にメーカーに販売し、再商品化されています。



レギュラーコーヒー残渣のリサイクル

カップ式自動販売機のレギュラーコーヒーは、お客様からオーダーをいただくと（商品ボタン選択後）、その都度、コーヒー豆を挽き、ペーパーフィルターで濾しています。その後、コーヒー残渣は、自動販売機内で脱水し、減量化した状態で、機械内部に据え付けてある専用回収箱に捨てられます。

アベックスでは、このようなレギュラーコーヒー抽出後の残渣を、2008年度から、中部エリアで、肥料へとリサイクルする取り組みを始めました。専用回収箱から回収されたコーヒー残渣は、ペーパーフィルターを除去し、食品以外の異物がない状態にして、肥料製造元に出荷しています。アベックスのコーヒー残渣から生まれ変わった肥料は、製造元との契約農家やJAに販売され、ご利用いただいています。2012年度からは、同様の取り組みを関東エリアにおいても開始しました。

一方、西日本エリアにおいても、レギュラーコーヒー

抽出後の残渣を、2010年度から炭へとリサイクルする取り組みを実施しています。

これらの取り組みは今後も継続して行い、リサイクル率を高めていく予定です。それにとともに、残渣回収エリアの拡大、回収の効率化に努めるとともに、食品リサイクルを通して、食品残渣の再生利用化を図り、食品廃棄物の削減に今後も貢献してまいります。

2012年度の実績

2012年度は、レギュラーコーヒー残渣の約110tを肥料化リサイクル、約63tを炭化リサイクルしました。



▲製造された肥料



▲製造された炭

中部リサイクルセンター

アペックスでは、2004年10月、RPF(固形燃料)製造の拡大効率化と、缶・ペットボトルの自社内リサイクルの体制を整えることを目的に、愛知県東海市に[中部リサイクルセンター]を開設しました。

同センターではRPF化ラインと資源化ラインの2つのラインをもち、廃棄物の削減と循環型社会構築に貢献するため、飲料自動販売機を通して排出される、使用済みのすべての容器包装類(紙カップ、原料袋、缶、ビン、ペットボトルなど)のリサイクルを自社で責任を持って行っています。



▲中部リサイクルセンター(円内は緊急事態対応訓練風景)

固形燃料(RPF)化ライン

固形燃料化ラインでは、自社の自動販売機から排出される紙カップ、原料袋などの容器包装類、廃プラスチック類(社外から受け入れたものを含む)を、破砕・圧縮し、直径15mm・長さ50mm程度のクレヨン状に加工します。製造した固形燃料は、検査機関に持ち込み、高位発熱量、灰分、水分、硫黄、塩素の5項目について成分分析を行っています。

石炭の代替として、乾燥用加熱炉の燃料やボイラーの燃料として使用されます。



[固形燃料化ライン]

■取り扱い品目
紙カップ・原料袋・紙パック・紙(複合紙)・
廃プラスチック類等 (※塩化ビニール不可)

■処理能力:3.6t/日

資源化ライン

資源化ラインでは、主に自動販売機を通して排出された、空きスチール缶・アルミ缶・ペットボトル・ビンを選別し、スチール缶は35kg、アルミ缶は7kgのブロックにプレスします。また、ペットボトルとビンは手作業で分別を行います。選別・圧縮された空容器は、各メーカーに出荷後、再商品化されます。



[資源化ライン]

■取り扱い品目
スチール缶・アルミ缶・
ペットボトル・ビン

■処理能力:12.0t/日



※ペットボトルの
ベラー機
■処理能力:4.0t/日



RPFについて

- 化石燃料の代替となりますので、資源枯渇防止に役立ちます。
- 化石燃料と同等の熱量があります。
- 灰分化率は一般的に3~7%*。石炭は11~15%程度なので、使用後の灰の埋立て処分量が削減できます。
- コンパクトな形状でハンドリング性に優れています。

- 歩留りが良いうえ、素材段階からリサイクル段階に要するエネルギーの小さい燃料です。
- 紙カップと廃プラの分別の必要がないため、作業効率にも優れます。
- 石炭(例 輸入一般炭)に対して、燃焼時に同一熱量回収を行う過程で石炭よりも約33%のCO₂排出量削減*になり、地球温暖化防止に貢献します。

※日本RPF工業会調べ

日本ベンダー整備株式会社の取り組み

▶ 自動販売機の長寿命化

アペックスは、1966年、オペレーターとして初めて自動販売機のオーバーホールを開始。その後、整備部門は、1976年、日本ベンダー整備株式会社として独立しました。

アペックスでは、機械メーカーから購入し、お客様先に設置した自動販売機を、当社規程に基づき、日本ベンダー整備株式会社で計画的に整備を行っています。この計画的なオーバーホールの実施により、長寿命化を図り、省資源化、廃棄物の削減に努めています。



▲全国からオーバーホールのために集まった自動販売機

▶ オーバーホールと環境負荷低減

日本ベンダー整備株式会社では、稼働時の故障や整備時の改良点等について、アペックスと情報の共有化を図りながらオーバーホールを実施しています。それらの情報は、次の新機種開発にも活用され、自動販売機の進化に大いに役立てられています。

また、単なるオーバーホールではなく、デザイン変更や新機能搭載等、積極的な改造や修理等も行っています。そして、既存の自動販売機の内部で使用している保温材や断熱材からホース1本に至るまで、1点1点の部材の材質を見直すこと等により、どれぐらいの環境負荷低減を図ることができるのか検証を続けながら、さらなる環境負荷低減を実現させるべく取り組みを行っています。

2001年6月に開設したJVRリサイクルセンターでは、廃棄する自動販売機から、社内基準に基づいた再生可能部品の回収を行っています。回収した部品は、日本ベンダー整備株式会社で再生し、自動販売機の整備や修理に使用しています。

2012年度の実績

2012年度は、5,437台の自動販売機の整備を行いました。



▲(オーバーホール) 分解工程

▶ 円滑で継続的なISO14001活動のために

日本ベンダー整備株式会社は、開発部の原料加工センターとともに、2000年12月、ISO14001を認証取得しました。自動販売機の整備工場と原料の加工センターという、オペレート業務とは異なる業務内容であることから、適用を受ける法令等もアペックスとは異なり、それぞれの厳しい基準を順守するために独自の活動を行っています。

活動をパソコンで一元管理し、文書管理や活動の進捗管理をはじめ、順守評価や不適合是正報告の管理や有資格者の管理・教育に至るまで、誰もがいつでも確認できるシステムで運用管理しています。また、行政等への届出や許可証の有効期限が近づく警告が表

示されたり、万一滞っている活動や報告がある場合にも警告で知らせ、注意を喚起します。

日本ベンダー整備株式会社では、この一元管理で、活動のクオリティの均一化を図りながら、今後も活動と管理の充実に努めてまいります。



オフィス飲料への取り組み

アペックスでは、オフィス向けに1993年より開始したフラビア®パックを使用する商品に加え、新たに2010年度より「POD Drink System(ポッドドリンクシステム)」を始めました。

現在、東京と大阪に2ヶ所の専任拠点を設け、アペックスならではのきめ細かなサービスをお客様から高く評価していただき、合計約6,000台のオフィス向けドリンクマシンが稼動しています。

▶ POD Drink System(ポッドドリンクシステム)

■特長

●一杯ずつ

ドリンクは、その都度、一つずつ窒素充填した個包装のカフェポッドからカップに抽出するので、いつでも淹れたて。本格珈琲の深い香りと味がお楽しみいただけます。もちろん、「ポッドドリンクシステムIMU」では、アイスコーヒーも簡単に作れます。

●カンタンお手入れ

コーヒーカスが出ませんので、器具を洗う手間がかかりません。いつでも清潔、衛生的です。

●環境負荷に配慮したコンパクト設計

レギュラーコーヒー専用機ですので、機械の仕組みや使用方法がシンプルで、しかも、消費電力や設置スペースもコンパクト。機械の製造過程、輸送等の各工程においても、環境負荷低減に努めました。

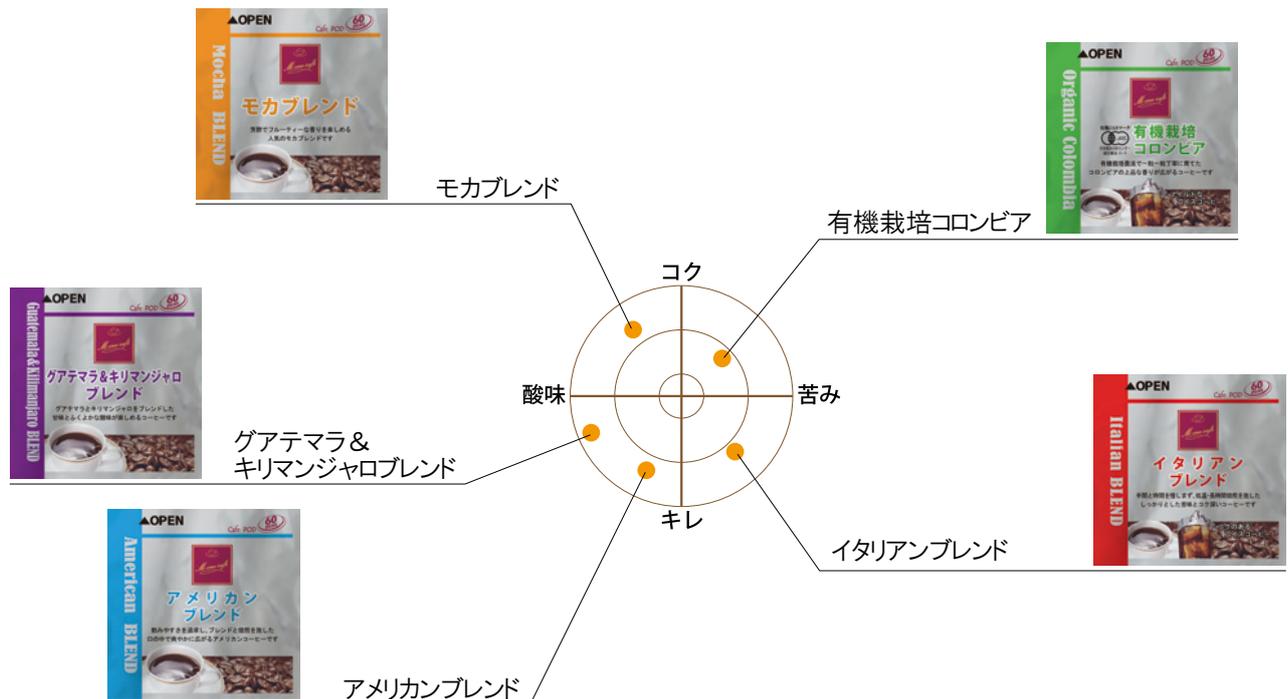
●さらなる省エネを実現した消費電力量



●スタイリッシュなマシン



■商品について



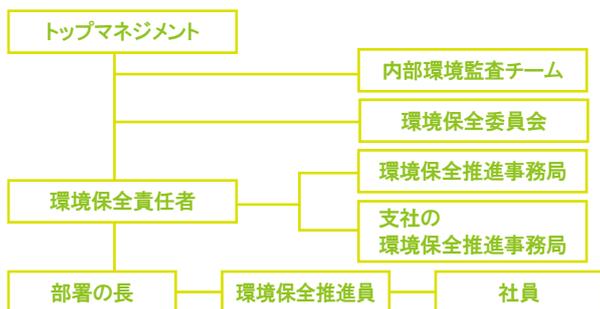


▶ アペックスの環境マネジメントシステム

ISO14001をグループで認証取得

アペックスでは、全事業所およびグループで、環境マネジメントシステムの国際規格 ISO14001を認証取得し、「PDCAサイクル」を徹底し、継続的な環境負荷低減活動に努めています。

■ アペックスの環境推進組織図



社内環境監査システム

アペックスでは、社内規程に基づき、毎年全サイトで社内環境監査を実施し、環境保全活動の妥当性を監視しています。

2012年度の監査実績

2012年度は、127拠点において、部門固有のテーマに沿って実施。その結果、[観察]として184件、[軽微な不適合]として63件、改善指摘事項が発見され、[重大な不適合]は発見されませんでした。指摘事項は、社内規程に基づき、速やかに是正処置に取り組み、各監査員が是正内容の確認を行いました。



社内環境監査
(南近畿支社)

▶ 環境関連コンプライアンスへの対応

アペックスでは、適用を受ける法令等の動向を確実に把握し、順守すべき法令等を登録表にまとめています。それに基づき、産業廃棄物処理委託業者の現地確認を行うほか、年3回全部署でチェックシートを用いた法令等の順守状況の点検を実施したり、行政のHPを活用した情報収集等を適宜行っています。

2012年度の順守状況

2012年度、環境関連法規等、適用を受ける法令等に関する違反事項はありませんでした。

環境関連の苦情・要望・問い合わせとその対策

2012年度、環境関連の要望・問い合わせは、環境保全活動に関する調査・協力依頼および問い合わせ等が、41件ありました。これらすべての依頼および問い合わせ等について、速やかに対応しました。



産廃処理委託業者の現地確認
(九州第一支社)

▶ 社員への環境教育

アペックスでは、環境教育の重要性・必要性を重んじ、ISO14001規格に則り、全事業所において、環境方針や環境目的・目標に関する教育や「理解度テスト」を実施しています。

対象	教育名
全社員	環境一般教育
新入社員	新入社員教育(環境教育有り)
車輛運転者	エコドライブ運転テクニック教育
力量業務従事者	環境特別教育
支社長・部署の長	管理者教育(環境教育有り)
課長	内部環境監査員教育

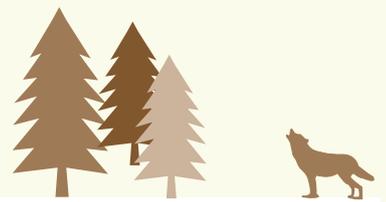


▲中部リサイクルセンターにおける新入社員教育



▲北関東支社における社員教育





▶ 環境計画の概要と評価

アベックスでは、持続可能な低炭素社会の実現を目指し、環境方針に基づき、継続的な環境保全活動を行っています。2012年度も、以下のような、具体的な環境目的・目標を設定し、達成するために取り組んできました。

環境影響評価の結果、環境負荷が大きいために環境評価点の高い [車輛給油量削減] や [紙カップリサイクル率向上] については、環境指標と経営指標との向きを揃え、今後とも業務改善の一環として取り組んでまいります。

環境目的	2012年度環境目標	実績	評価
地球温暖化防止・資源枯渇防止	【化石燃料の有効活用】(全部署) 車両の燃費向上：11年度比0.0%削減	達成率：97.0%	☹
廃棄物削減	【紙カップリサイクルの促進】(事業統括本部) 年間紙カップリサイクル率：45.0%	達成率：108.0%	☺
社会貢献	【一部署一役運動】(全部署で事務所周辺の清掃活動等を実施) 頻度：2.0回/月(80%の部署で達成)	達成率：108.5%	☺
拠点の業務改善活動	【業務改善による環境負荷低減】(全部署) 達成部署件数割合：80%以上	達成率：102.5%	☺
業務改善活動	【自動販売機のトラブル件数削減】(サービス品質部) トラブル発生件数：05年比14%削減	達成率：117.8%	☺
環境対応型自動販売機開発	【環境対応型自動販売機の開発】(開発部) 総合評価点数：100点	達成率：106.5%	☺
業務改善活動	【台数予算の達成】(営業企画部カフェサーバーPJ) 毎月の訪問件数：予算台数の5倍	達成率：162.4%	☺
地球温暖化防止・資源枯渇防止	【省エネルギーの推進】(中部リサイクルセンター) 処理量当たりCO ₂ 排出量：08年度比15%削減	達成率：119.3%	☺
業務改善活動	【利益改善】(経営企画室 フード部門) 売上：2011年度比3%増	達成率：111.0%	☺
業務改善活動	【車輛事故発生の低減】(総務部) 年間車両事故件数：07年度比12%削減	達成率：129.4%	☺
グリーン調達	【グリーン購入法特定調達物品等の調達の推進】(総務部) グリーン品目数割合：総購入点数に対する83%	達成率：100.1%	☺

※評価について ☺：達成 ☹：未達成

▶ 環境コスト

環境保全活動に伴う全コスト (百万円)			
会計区分	費用	効果	
サービス活動により生じるコスト	リサイクル費用	80.4	156.0 ※1
	廃棄物処理費用	337.2	—
	その他環境整備費用	77.3	—
管理活動におけるコスト	ISO維持費管理費・教育費等	7.7	164.0 ※2
社会活動におけるコスト	展示用パネル・パンフレット等	1.0	—
合計	503.6	320.0	

※1 再生品販売費(衛生紙、RPF、資源化物、その他)

※2 2000年(全社ISO14001認証取得活動開始)と比較した光熱費・帳票代等の削減費用



▶ 一部署一役運動

アペックスでは、「私たちは、地域社会に貢献し信頼を集めます。」を行動宣言の一つに掲げ、地域社会との交流・社会貢献活動に力を注いでいます。

2012年度は、アペックスが経営する東京・有楽町の仏レストラン「アピシウス」において、2011年から復興支援を目的に開始した「チャリティーカレーフェア」を4月・11月に行った他、事務所周辺の定期清掃、市町村の社会福祉協議会へのリサイクルトイレ紙ペーパー

**被災地を支援するため、
仏レストランでチャリティーカレーを開催しました。**



▲レストラン「アピシウス」でのチャリティーカレー

**地域清掃や、献血は社会貢献の基本。
「こども110ばんのいえ」としても地域社会のお役に立っています。**



▲毎年恒例の献血
(東京東支社・東京西支社)



▲営業所は「こども110ばんのいえ」
(高知営業所)

パーの寄託、企業・NPO法人・自治体等が主催する「環境フェア」や環境教育への参加・支援、地域のコミュニティラジオにおけるPRを通しての啓発活動等を行いました。

今後も、いま自分たちにできることは何なのかを見つめつつ、できる限り積極的な地域社会との交流、社会貢献を図ってまいります。

**地元の水道水のPR活動や
地域コミュニティラジオ等での啓発活動も
積極的に行いました。**



▲「こども110ばんのいえ」における給水スポットでは、名古屋市上下水道局様と地元のおいしい水道水をアピール



▲旭川市で開催された「日本水道協会第81回総会」。水の“地産地消”と災害対応型カップ式自販機の訴求を行いました。



▲FMやまとで啓発活動

▶ リサイクル工場見学のカン

アペックスでは、弊社のリサイクルシステムをご確認いただくため、お客様のご要望に合わせて、富士市のストックヤード及び製紙工場、中部リサイクルセンター、日本ベンダー整備株式会社等のご案内をしております。



▲中部リサイクルセンター



▲古紙ストックヤード



環境保全活動の歩み

国内外の主な動き

- ・「環境基本法」制定
- ・「JISQ14001」発効
- ・京都議定書(COP3)開催(「京都議定書」採択)
- ・「家電リサイクル法」制定

- ・「PRTR法」制定
- ・「循環型社会形成推進基本法」等循環関係法6本成立
- ・環境省発足
- ・「フロン回収破壊法」制定

- ・「第2回地球サミット」開催(ヨハネスブルグ)
- ・「自動車リサイクル法」制定
- ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
- ・「JISQ14001:2004」発効
- ・「京都議定書」発効

- ・「電気用品安全法」経過措置期間終了

- ・「改正容器包装リサイクル法」「改正フロン回収破壊法」「改正食品リサイクル法」「改正電気用品安全法」施行
- ・「第1回アジア・太平洋水サミット」開催
- ・「京都議定書」第一約束期間開始
- ・洞爺湖サミット開催
- ・「生物多様性基本法」施行

- ・「改正家電リサイクル法」施行
- ・コペンハーゲン会議(COP15)開催

- ・「改正省エネ法」施行
- ・「改正温対法」施行
- ・国連地球いきもの会議(COP10)開催
「名古屋議定書」愛知ターゲット採択
- ・カンクン会議(COP16)開催
- ・東日本大震災
- ・ダーバン会議(COP17)開催

- ・国連持続可能な開発会議(リオ+20)開催
- ・国連地球いきもの会議(COP11)開催
- ・ドーハ会議(COP18)開催
- ・「京都議定書」第一約束期間開始(日本は不参加)
- ・「小型家電リサイクル法」施行

アペックスグループの動き

- 1966年 ・自動販売機のオーバーホールを開始
- 1973年 ・自動販売機のオーバーホール工場開設
- 1976年 ・自動販売機整備部門を
「日本ベンダー整備株式会社」として独立
- 1981年 ・カップ式自動販売機「APEX 2400」発表
- 1986年 ・カップ式自動販売機「APEX 5000」発表
- 1993年 ・オフィス向けドリンクシステム「フラビア®S220」発表
- 1996年 ・環境部を設立
- 1997年 ・デポジット式紙カップ専用回収機「カップエコジット™」発表
- 1998年 ・非木材紙カップの使用開始
・使用済み紙カップのマテリアルリサイクル開始
・カップ式自動販売機「APEX 120RV」発表 ※業界初・映像情報装置搭載
- 1999年 ・ISO14001認証取得(東京本社・開発部・横浜南SC・厚木SC)
- 2000年 ・グループ会社日本ベンダー整備株式会社にてISO14001認証取得
- 2001年 ・愛知県で移動式固形燃料化設備を導入
※サーマルリサイクルを開始
・カップ式自動販売機「APEX 120QV」発表 ※カップミキシング機構搭載、世界最速クイックベンダー
・「有機栽培生豆100%使用コロンビア」発売開始
・JVRリサイクルセンター設立
・環境報告書発行開始
- 2002年 ・全社(101サイト)にてISO14001認証取得
- 2003年 ・新リサイクルプラント建設企画
- 2004年 ・中部リサイクルセンター設立 操業開始
- 2005年 ・カップ式自動販売機「APEX 130REC(T)」発表 ※大型タッチパネル搭載
・中部リサイクルセンター 全ライン操業
・「ウェステック大賞2005」において事業活動部門賞受賞
・グループ会社株式会社名古屋フーツにてISO14001認証取得
・中部リサイクルセンター 拡張工事
・「資源循環技術・システム表彰」において会長賞受賞
・バイオガソリンのテスト使用を開始
・「全国高等学校校定時制通信制教育六十周年記念式典」において文部科学大臣賞を受賞
- 2006年 ・「VENDEX JAPAN 2008」に出展
- 2007年 ・レギュラーコーヒー残渣のリサイクル(肥料化)開始
・カップ式自動販売機「APEX 120QREC」発表
・カップ式自動販売機「APEX 50RB」発表
・使用済みフラビア®パックの固形燃料化を開始
・ISO14001認証取得から10年が経ち、「10年継続賞」受賞
・株式会社アペックス西日本設立
- 2008年 ・カップ式自動販売機「APEX 100QRC」発表
・コカ・コーラウエスト株式会社と資本・業務提携契約締結
・レギュラーコーヒー残渣のリサイクル(炭化)開始
・「ブラジルブレンド」発売開始
- 2009年 ・被災地の避難所にて「復興支援自販機」で被災地を支援
・仏レストラン「アビシウス」にてチャリティーカレーを開催
・宮城県多賀城市と災害支援協定を締結
・大府本社、改装工事が完了
- 2010年 ・仏レストラン「アビシウス」にてチャリティーカレーを開催
・関東エリアで、レギュラーコーヒー残渣のリサイクル(肥料化)開始
・倉敷営業所にて電気自動車「MINICAB-MiEV」導入
- 2011年 ・株式会社アペックス、創立50周年を迎える
・カップ式自動販売機「APEX 85QVR」発表 ※魔法瓶構造湯タンク搭載、CO₂冷媒使用
・間伐材紙カップの使用開始
・仏レストラン「アビシウス」、開業30周年を迎える
- 2012年
- 2013年

 環境・社会報告書

Sustainability Report 2013

お問い合わせ



アベックスグループは、環境マネジメントシステムの国際規格ISO14001:2004を認証取得し、環境保全活動に積極的に取り組んでいます。

<http://www.apex-co.co.jp>



国産間伐材10%以上配合紙

森林循環紙



K0301090



Waterless^{AOI}
Printing. Naturally.



植物油インキを使用しています。